



Title	タイ人教師と日本人教師のよりよい協働を実現するために必要な要素：高校における事例より
Author(s)	門脇, 薫; 中山, 英治; 高橋, 雅子
Citation	問谷論集. 2021, 15, p. 1-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83212
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

タイ人教師と日本人教師の よりよい協働を実現するために必要な要素

——高校における事例より——

門脇 薫・中山英治・高橋雅子

〈キーワード〉 教師間協働 タイの高校 ティームティーチング
日本語非母語話者・母語話者教師 SCA T分析

1. はじめに

タイの日本語学習者数は国際交流基金が2018年に実施した「海外日本語教育機関調査」によると184,962人（国際交流基金2018）であり、そのうちの77.8%を中等教育の学習者が占めている。タイは学習者全体数では、184,962人で世界第5位であるが、中等教育の学習者が占める割合が、インドネシア（92.0%）、韓国（77.4%）と同様に、77.8%と多く、学習者の大部分は高校（後期中等教育）で学ぶ高校生である。高校での日本語教育は学校教育で行われるため、その国の言語政策や教育政策が大いに関係している。タイでは、2010年のカリキュラム改定により日本語学習者が急増し、そのため日本語教師が不足するという事態になった（国際交流基金「国・地域別情報」より）。

また、タイの高校の日本語授業では、日本語母語話者教師（以下「NT」）が日本語非母語話者教師（以下「NNT」）と共に日本語を指導するようになった（Kadowaki 2018）。タイの高校で教える日本語教師の多くは、タイで教員養成を受けた現地の教員免許を持つタイ人教師（NNT）で、タイ人のNNTがメインで日本語教育を行っている。そこに最近では日本語母語話者である日本人教師（NT）も日本語授業に参加するようになった。このような背景を踏まえると、海外の高校では「NNTとNTの教師間が共に関わりを持つ機会が生じるため、教

師間の協働が必然的である」(門脇ほか 2014)。しかし、タイの高校の教師間協働において、どのような点が問題で、どのような点でうまくいっているか、具体的には明らかになっていない。本研究では、NTを受け入れている高校を対象にし、NNTとNTのよりよい教師間協働を実現するために必要となる要素を抽出することを目的とする。本研究では、教師間協働を中山ほか(2015)の定義にしたがい「複数の教師が日本語教育の現場で問題解決や目標に向かって協力しお互いに成長すること」としている。

2. タイの日本語教育におけるNNTとNTの教師間協働に関する先行研究

タイの高校では、第2外国語として8つの言語が教えられており、そのうちのひとつが日本語である。タイの高校の日本語教師は、約70%がタイ人教師で、約30%の日本人教師¹が教えている(国際交流基金「国・地域別情報」より)。中等教育における日本語学習者数の多いインドネシア及び韓国と比較すると、タイではNTが占める割合が大きい²。日本語学習者数の増加に伴い、高校で教えるNTも増加したと考えられるが、前述のとおり高校ではNNTとNTが協働で日本語指導を行う必要があると考えられる。

タイの高校で日本語を教えるNT対象の2013年の調査では、日本人教師とタイ人教師との教師間協働の実態が報告されており、タイの高校では、NTが単独で授業を担当する場合とNNTと一緒に二人で教室に入るタイプのティームティーチング(以下「TT」)をする場合がある(門脇編 2015)。また、2014年から、国際交流基金アジアセンターの「日本語パートナーズ事業」が始まり、日本語母語話者がタイの高校に「日本語パートナー(以下「NP」)として派遣され、アシスタントとしてタイ人教師と日本語の授業でTTを行なっている³。

TTは教師間協働の一つの形式である。タイの高校の日本語教育においてTTが行われている状況を見ると、教師間協働の場がさらに拡大していると言えるであろう。それにもかかわらず、タイの高校における教師間協働において、どのような点が問題で、どのような点でうまくいっているか、具体的には明らかになっていない。これはタイに限らず、海外の日本語教育におけるNNTとNTの教師間協働に関する研究がまだ十分には行われていない現状があるからだと考えられ

ている（中山ほか 2015）。

タイの日本語教育においては、タイ人教師と日本人教師の教師間協働に関する研究が他の国と比較すると多く見られる（香月ほか 2009、香月 2011、池谷ほか 2012、中山ほか 2015、中山 2016、松尾ほか 2014、香月ほか 2017、中山ほか 2017 等）。これらの先行研究は大部分が大学の日本語教員を対象にしたものである。大学では一人の教師が独立した一つの教科を担当するという分業的な教え方を行っているが、NT は NNT と情報共有を望んでいる。しかし、実際は大学や学科からの制約や NNT と NT の仕事観の違いなどの要因で情報共有ができていないことがこれら先行研究で指摘されている。

本研究では、タイの日本語学習者数の大部分を占める高校の日本語教育を対象にし、NNT と NT のよりよい教師間協働のために必要となる要素を抽出するため次のような調査を行った。

3. タイの高校における教師間協働に関する調査

3-1. 調査対象

これまでに NT を受け入れた経験があり、調査時にも NT を受け入れているバンコク市内の高校 1 校、及びバンコク郊外の 2 及び地方の高校 1 校計 4 校を選定⁴し、2015 年 9 月及び 2017 年 1 月に訪問し調査を実施した。調査対象となったのは、表 1 のとおり高校①～④の 4 校におけるタイ人教師（NNT）7 名、日本人教師（NT）4 名、合計 11 名である。

表 1 調査対象者内訳 (人)

調査機関	調査年	タイ人教師 (NNT)	日本人教師 (NT)
高校①	2015 年 9 月	1 (NNT1)	1 (NT1)
高校②	2015 年 9 月	2 (NNT2 / NNT3)	1 (NT2)
高校③	2017 年 1 月	2 (NNT4 / NNT5)	1 (NT3)
高校④	2017 年 1 月	2 (NNT6 / NNT7)	1 (NT4)
合計		7	4

タイの中等教育機関の中でも日本語学習者が多い学校では、一つの学校に複数のタイ人の日本語教師が勤務している場合がある。高校によってはNNTとNTがTTをする場合としない場合があるが、本調査では、調査時にTTを行っているNNTを対象としている。また、表2の「NTとのTTの経験の有無」は、調査時に在籍していたNT以外に、NNTがこれまでNTとTTを実施した経験があるかどうかということを示している。

表2 NNTのバックグラウンド

	NNT1	NNT2	NNT3	NNT4	NNT5	NNT6	NNT7
日本語教育経験 (年)	4	1	15	3	1	6	14
NTとTTの経験の有無	有	有	無	無	有	無	有

3-2. 調査方法

表1の高校①～④を訪問し、NNTとNTの授業を見学し、NNT及びNTの双方に個別に30～40分程度の半構造化インタビューを実施した。インタビューは筆者が全て日本語で行なった⁵。質問事項は、「1 対象者の属性及び各自の現在の日本語教育の状況」「2 NT及びNNTとの協働の中で考えることや思うこと」「3 各自が考える理想的な協働とは何か、そのためのコミュニケーションの取り方や工夫」、その他関連する内容である。調査時には、教師間協働の意味するところを広く「NTとNNTとが授業や業務など幅広く一緒に仕事をする」と捉え、調査対象者に伝えた。

データ分析では、インタビュー内容が録音された音声データを文字化し、大谷(2019)の「Steps for Coding and Theorization (以下「SCAT」)」により分析し、教師間協働に関連する内容を採集した。SCATとは社会調査などにおける質的調査データなどの分析手法の一つで、インタビューなどによって得られたデータにコードを付け、そのコードをもとに理論化を行う手法である。

SCATの分析は、大谷(2019)に従い次のように行った。まずマトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに<1>から<4>の順にコードを考えて付ける(表3「SCAT分析によるNTの語りのデータの一部分」)

を参照)。次に、＜4＞のテーマ・構成概念を意味のつながりをもたせて紡ぎ合わせ、ストーリー・ラインを記述し、そこからこのデータから言えることの理論記述を行うという手順である。

表3 SCAT 分析による NT1 の語りのデータ例（一部分）

番号	発話者	テキスト	<1> テキスト の中の注 目すべき 語句	<2> テキスト の中の語 句の言い かえ	<3> 左を説明す るようなテ キスト外の 概念	<4> テーマ・ 構成概念	<5> 疑問・課 題
1	NT1	そのコンテストの日本人ができるバックアップを基本的に全部やって	日本人ができるバックアップ	行事での役割分担、NTが行事をバックアップ	NNTとNTの	求められるNTの役割	「一緒にやること」と「やらないこと」?
2	聞き手	先生の授業を手伝うわけじゃないんですもんね。			協働例		
3	NT1	そうですね。手伝うとかはない、覗きに行ったりはします、どこまで、どんな感じで教えてるのかなって感じで	覗きに行ったりはします	NNTの授業を見学に行く	NNTの授業を知ろうとする姿勢	協働相手からの学び	NNTの授業への関心?
4	NT1	初めてで、それも1人でやると思ってなくて、完全にアシスタントやと思って授業と一緒に入ってと思ったんですけど、	1人でやると思ってなくて	単独で授業を任されて驚いた	渡タイ前との情報ギャップ	単独で授業を行う現実と不安	
5	NT1	あ、そっか、タイだなんて思って。	タイだな	タイだからこういうこともある	タイに対して再認識	認識の変化	

高校①～④において得られた調査データを、上記の手順に従って分析した結果について以下に述べる。なお、発話は通し番号と調査対象者の後に記号「:」を付け斜体にし、語りの中の()は筆者が補足し、構成概念は[]で示した。

4. 調査結果

4-1. 高校①のデータから抽出された構成概念

高校①では、NT1はNNTと別々の授業を単独で担当している。NT1は高校に7か月間直接雇用され、大学を休学して教えに来ている。大学で日本語教育について学んだが、日本語教育経験はない。表3の発話番号4及び5のようにタイに教えに行く前はアシスタントとしてNNTと一緒に教室に入りTTをすると思っていたが、独りで授業を任せられ[単独で授業を行う現実と不安]を感じた。しかし、(1)のようにタイだからこういうこともあると[認識の変化]が生じ、(2)の語りのように[協働相手からの学び(表3の発話番号3)]や自分なりの努力で授業に慣れていった。

(1) *NT1*: あ、そっか、タイだなんて思って。

(2) *NT1*: (*NNT*の授業) 見学と、実際にやってみて。でも見学じゃ、やっぱ全部タイ語だし、わからないとこが多いんで、直接法で日本語だけで日本人だけでやって、どれぐらいわかるかっていうのが…。

具体的な教師間協働の例として、授業進度をお互い連絡し合うような[NNTとNTによる情報共有]をすること、またNTがNNTに文法項目の導入の仕方や練習など(3)のように[気軽な授業相談]をすることが挙げられる。NNTとNTは同じ部屋に自分の机があり一緒にいるので、顔を合わせて口頭で連絡することができ、コミュニケーションを取りやすい環境にある。

(3) *NNT1*: (*NT1*は) いつも、私に相談して、教えます。どうやって教えますか。(中略) がいいですね。

表3の発話番号1のようにスピーチコンテストなどの行事の際、NTが手伝いをしており、授業以外でも[求められるNTの役割]を積極的に行っていること

が(4)からも見受けられる。

- (4) *NNT1* : スピーチの原稿を学生がタイ語で書いて、それをタイ人の先生が日本語に訳して、僕がそれを日本語のスク립トを作って、それを使って練習する。そのコンテストの日本人ができるバックアップを全て基本的に全部やって…。

NNT1 は *NT* の受け入れは初めてで、(5) の語りに見られるようにタイ人教師がタイ語で文法を教え、日本人教師が日本語で会話を教えるというような[協働に関する固定的役割観]を持っている。日本文化の紹介やイベント等を実施する際も、*NNT1* が *NT1* と一緒にすることはほとんどないようである。

- (5) *NNT1* : 文法をタイ語で説明して、(*NT* は)、話すこと、聞くこと、練習します。

書道を体験するという授業も、*NT1* が単独で簡単な日本語のみを使用して行った。この学校では *NNT* と *NT* は異なる授業科目を担当し、単独で教えることが前提となっている。そもそも二人一緒に授業に入って *TT* をするという発想が *NNT* や学校にはないようである。*TT* をしないのは、日本語学習者数が多く、教師のマンパワー不足によりクラスを分けて *NNT* と *NT* がそれぞれ別のクラスを担当する必要があるといった[協働を困難にする学校側の要因]が存在している。また、英語や中国語の授業でも母語話者教師は単独で担当しているので、他の教科と足並みを揃えるといった[協働を困難にする学校側の要因]のため、日本語も同様に単独で *NT* が授業を行っていると考えられる。

その他、*NNT1* は、*TT* をしない理由を(6)のように述べている。

- (6) *NNT1* : 私と一緒に (*TT*) だったら、学生は日本人、聞いてない。タイ学生は、聞くことを練習したくないと思います。

上記(6)は、教室で日本語しか使用できない環境を作るため *NT* が単独で教える方がいいという *NNT1* の考えを表しているが、日本語教授経験がなく、タイ語でのクラスコントロールができない *NT* が、単独で日本語のみ使用して授業

を行うのはかなり困難なことであろう。しかし、(7)、(8)のようにタイ語を生徒から学んだり、生徒の中のリーダーの協力を得て通訳してもらう等、[自分ができること]をしてクラスコントロールをしている。

- (7) *NT1* : (授業で) 僕がタイ語を使って下手などを見せると、みんな「おお」みたいな。面白いなとかって、時々あえて黒板にタイ語を書いて「合ってる？」みたいな、聞いて生徒が「こうだよ」「違うよ」とか。
- (8) *NNT1* : (クラスコントロールは) 日本人には難しいです。でもタイの学生はリーダーがいますね。リーダーは友達は怖い。(聞き手「先生みたいで?」) はい、そうです。

しかし、NTに日本語を習わせたいという校長や生徒の父兄等の周囲の意向があり、前述のとおり中国語科も英語科も母語話者教師がいるので日本語科にもNTが必要であるという「native-speakerism (母語話者主義) (Holliday 2016)」の傾向がNNTの語りに見られた。

NNT1がNT1に授業を単独で任せられるのは、(9)のようにNT1と普段から[密なコミュニケーションによる信頼関係]が存在しているからである。NTが事務的な業務等仕事でタイ語の使用が必要なときには、NNTがタイ語の通訳の協力をしている。また、NNT1はNT1のために、休みの日に観光案内や買い物に連れて行ったり、タイ語学習を支援したりと生活面でもNT1の支援をしている。

(9) *NNT1* : (二人のコミュニケーションは) いいです。関係は大切です。いつも、相談。コミュニケーションしなければなりませんね。

二人のよりよい関係構築には、NT側の姿勢も大きく関わっている。このNT1には、(10)のようにNNT1からの要求や不測の事態にも[求められるNTの役割]を果たそうとしていることが見受けられる。これは[協働相手や学校への感謝の念]が強いからである。NNTとNTはお互いに助け合う存在であることが大切だと認識し、[互恵的な役割付与]としてできる限り貢献し、相手の要求にもできるだけ応えようとしている。そして、NNTとNTが対等の立場であるために、(11)のとおり[協働相手に頼る姿勢]や[協働相手からの学び]を心がけて

いる。

- (10) NT1 : 学校から来るのは何でもありで。(中略) (教師の) ライセンスも何もないし、コネも経験もないし知識もない、タイ語もできない。でもちゃんと無償ボランティアじゃなくてちゃんとお金をもらって働かせてもらってるし、もう何でもします。
- (11) NT 1 : 積極的にお世話になろうって感じですかね。もっとタイ語勉強してタイ語上達させて、迷惑かけないようにしようとか、授業ももっと研究してやろうとか、自分を磨こうとはあんまりせずに、もうわからなかったらわからないで先生に聞いて、教えてもらったりだとか。割と頼ろうって感じで。無理しない。(中略) タイだし。お世話になってなられてが今一番いいんだみたいな。

4-2. 高校②のデータから抽出された構成概念

高校②では、2012年にNT2を初めて採用し、調査実施時の2015年時点も継続してNT2が教えている。この高校は生徒数が多く授業のコマ数が多いため教師の人手不足が生じており、[協働を困難にする学校側の要因]で二人の教師が一緒に授業に入るTTをする余裕がなくなった。そのため、NT3は着任して1年目はNNTとTTをしていたが、2年目以降は一人で教えるという[時間経過による協働体制の変化]が起きている。しかし、(12)、(13)に見られるようにNT2もNNT2も二人で教室と一緒にいるタイプのTTが可能であればTTを行うことを希望している。前述の高校①と同様に高校②でも[協働を困難にする学校側の要因]が存在する。TTを進めていくための[学校側の支援体制]が十分ないと教師間協働を行うことは難しいと言える。

また、NNT2は大学生の時に1年間高校で教育実習をした時に、その高校にいたNTとTTをした経験がある。そして(13)のように、単独で教えるのもTTで教えるのもどちらもよいと語っており、教育実習時の[自分のTTの経験による認識]からNTとTTをするという教師間協働を一つの可能な選択肢として捉えていることがわかる。

- (12) NT2 : (NNTと)一緒にした方がいいと思うんですね。去年一緒にしてた

時は、役割分担みたいなのがありますよね。日本人がした方がいいところと、タイ人、もう文法の説明とかは絶対タイ語の方がわかりやすいですよ。でも発音とかになったらやっぱり日本人の方がいいかなみたいな。

(13) *NNT2*: (一人で教えるのと *TT*) 私は両方いいと思います。「(もしできたら *TT*) したい、したいですね。

(14) で語られているように高校②では日本語ボランティアとの *TT* の例も見られた。この高校では、常勤の *NT* 以外に以前から定期的に複数名の日本語母語話者の日本語ボランティアが授業に参加している。日本語教育経験 15 年の *NNT3* は、複数の日本語ボランティアが参加する授業の教室活動をデザインし、授業と一緒に活動をしている。このような日本語ボランティアが参加する授業では、*NNT3* は必要に応じて通訳をする等 [互恵的な役割付与] が見られた。一方で、授業の数日前に日本語ボランティアに授業内容について連絡するのは、*NT2* が担当している。このような教室活動によって、(15) で *NNT2* が語っているように日本語ボランティアが [求められる *NT* の役割] を果たし、生徒たちの学習動機が高められ、日本語使用の機会が創出されているようである。

(14) *NNT3*: ときどき、うちの学校は金曜日日本人のボランティアがいますから。 *TT* みたいですね。1 か月 2 回ぐらい。生徒たちも好きだそうです。ボランティアが来る時、もう楽しい。

(15) *NNT2*: 私も (クラス) コントロールとかよくできます。生徒たちも何か、日本人と話すことができてよかったと思います。

NT2 は日本の学校で長く教師として勤務し、日本やタイの他の学校で日本語教育の経験がある。タイの他の学校で *TT* をしていた時は、*NNT* が *NT* をうまく活用しておらず、[教師間協働ができない状況への不満] を持っていた。現在の高校②でも、学校行事や会議等で授業が突然休講になり指導計画どおりに授業が進まないことに [学校への不満] を感じていることが (16) からわかる。*NT2* は文字の導入を早く終えて本文の内容に進みたいと考えている一方で、*NNT* は進度や到達度の変更を問題視しておらず、[*NNT* と *NT* の間の教育観のずれ] が生

じている (17)。

(16) NT2: 自分の中ではスケジュールがあるんですね。だいたい前期はここまでやりましょうみたいな感じとかあるんですけど、授業準備していても(授業が)潰れることは再三なんですね。

(17) NT2: 私はある程度進めていきたいというのがあってあるんですね。この前やっとかタカナ終わったみたいな感じだけど、内容をやりたいと思うんだけど…。そのへんとかがイライラする時があるんですね。私。

しかし、(18) のように NNT2・NNT3 と NT2 は別々に授業を行い、NT2 は独自に教材を作成し自由に授業をし、[干渉回避の工夫] をしている。日本文化紹介や日本語キャンプ等外部と関わる大きな行事では、(19) のとおり、NNT2・NNT3 と NT2 は [分業による役割分担] で業務を行っている。

(18) NT2: なんか本当に別々なんです。(略) もう自由にやってくださいっておっしゃってたし、今年はまだ日本式でアイウエオ順には教えてないんですね。(中略) 教科書自体がないので毎回プリントですね。すごい忙しいです。家に帰ってからもいつもプリント作ってますね。

(19) NT2: (他の学校も参加する日本語キャンプの時は) 役割に分担いっぱいあって、例えば文化活動の体験とかだったら、ボランティアの方もいっぱい呼んで役割決めて。それはもう別々なので。ボランティアの方が来られる時のコンタクトは全部私が取るんですね。例えばお茶をやる時とかは、ポットが何台欲しいとか、タイ人の先生が調達。

NNT2 は、NT2 と一緒に協働で何か文化紹介をしたいというアイデアがなく、積極的に自分から NT2 と協働で何かをしようという意識は見られず [分業による役割分担] を受け入れていることが (20) からわかる。(21) で NNT2 が語っているように NNT2・NNT3 と NT2 は積極的に協働で仕事をしているわけではないが、お互い深く関わらない [干渉回避の工夫] をし、大きな問題は生じていない。

- (20) *NNT2* : 今はアイデアがないですね。(NTと一緒にやろうと言われたら)一緒にやりたいですね。日本の着物とか浴衣とか着る、文化を教える時…。
- (21) *NNT2* : (問題もないし、あんまりNTとの関係も) ないですね。

高校②が上述の他に協働で行っていることは、[教師間の生徒情報の共有]をすることや、NT2が授業で生徒に注意したい内容をNNT2・NNT3にタイ語で通訳してもらったりNT2がNNT2・NNT3に日本の最近の流行を紹介したりといった[互恵的な役割付与]である。このように[ゆるいタイプの教師間協働⁶]が成立している背景には、NT2とNNT2・NNT3の双方によって[協働相手への気遣い]がなされているからだと考えられる。例えば、NT2は授業で生徒の前でNNT2・NNT3の間違いを訂正しないよう気をつけている。一方、タイ語がわからないNT2の前ではNNT間でタイ語を使用しないなどである。

4-3. 高校③のデータから抽出された構成概念

高校③では、NNT2名とNT1名が日本語を教えており、NNTとNTと一緒に教室に入りTTを行っている。NTを受け入れる利点、NNT・NTの役割等については高校①②と同様の概念が抽出された。高校③では、日本の生徒と交流する活動の企画、姉妹校を新たに探すなどが[求められるNTの役割]である。

NNT4は、前任校にNTがいて別々に日本語の授業を担当していたが、今の学校で初めてNTとTTを始めた。NNT5は調査時の1年前に他のNTとTTの経験がある。NNT5は(22)のように1年前を振り返り、初めてTTした時はどのようにしてよいかわからず準備も多く大変だったが、今はTTにも慣れたためTTを良いものだと[自分のTTの経験による認識]を持っている。NNT4の方が日本語教育経験は長い、TTの経験があるNNT5の方が一緒にTTしやすいと、NT3は述べていた。一度でもTTを経験するとどのように協働で教えたならよいか理解でき、[再認識したTTのよさ]が見て取れた。

- (22) *NNT5* : (TTの) 教え方が少し大変。去年は全部初めてだから。でも今年は大丈夫です。準備は大変じゃない。

学校の行事や教職員の交流イベント等があった場合、NT3 はよく誘いを受けようである。そして、NT3 は誘いを断らず [協働相手との人間関係の構築] を心がけている。また、行事の際には、例えば来賓に飲み物を出す (23) 等、スタッフとして [自分ができること] の学内業務を積極的に引き受けている (24)。

(23) *NNT4* : *NT* は何でも手伝いました。例えば学校のイベントがあったら *NT* は私と一緒に手伝います。例えば、偉い人のサービスとか。ジュースサーバーとか。

(24) *NT3* : 行事のとき水回りの掃除とか。タンブンと言ってお坊さんが学校に托鉢に来た時に食べ物を渡すんですけど、朝 6 時半に学校に行って自分がそれをしてました。家が学校から近いんで。

(25) *NNT4* : (タイ人の) 英語の先生たち *NT3* が好きですよ。

筆者は高校③を訪問の際、英語等の他の科目のタイ人教師とも *NT3* について話をする機会があったが、上記のように *NT3* は授業以外でも [自分にできること] で学校に貢献することによって、他の教師からも信頼を得て、[協働相手との人間関係の構築] をしている。(25) で *NNT4* が述べているように他の教師からも慕われていることがわかった。

NNT5 は前述のとおり、[自分の *TT* の経験による認識] により *TT* の良さを知っている。*NT3* がまだタイの高校で十分な日本語教育経験がなくても、(26) のように *NNT5* は、自身が以前他の *NT* から学んだことを現在の *NT* に教えるという [過去の学びの共有] や、お互いに一緒に経験することを語っている。このように *NNT5* には教師として [協働相手と共に成長すること] を望む姿勢が見られる。

(26) *NNT5* : 大丈夫です。(*NT* と) 一緒に経験します。教え方たくさんあります。(中略) (前の *NT* から) 私はもらいました。(中略) 経験がない、私が教えます。(前の *NT* から教えて) もらいました。(教えてもらったことを) 私が、(教えて) あげます。

4-4. 高校④のデータから抽出された構成概念

高校④でも、NNT2名とNT1名が日本語を教えており、NNTとNTと一緒に教室に入りTTを行なっている。NNT6はTTが初めて、NNT7は前任校で他のNTとTTの経験がある。NNTは[TTの経験による認識]によってNTへの対応が異なっている。NNT6の授業では、NTは教室の後ろにいることが多いので自分がいる意味があるのかと思う時があるようで、TTが十分に機能していないことがわかる。一方、NT4はNNT7とは、授業の2、3日前に一緒に[気軽な授業相談]をし、お互いにアイデアを出し合い、授業の準備をするといった[密なコミュニケーションによる信頼関係]があることがしていることが(27)、(28)の語りから見てとれる。

(27) NT4: やりやすい、やりにくいというのはないですけど、楽しいのは NNT7 ですね。いろんな活動をやろうとするから。

(28) NNT7: 教える前に、一緒に考えて、どんなこと教えたいですか。時間とかぴったりですか。

このNT4も高校①のNT1と同様に、大学を休学してタイに教えに来ており、日本語教育の経験がこれまで十分にない。また、授業で生徒に指示できるほどのタイ語能力もない。NT4は[単独で授業を行う現実と不安]を感じていた。しかし、ここでも高校①のNT1と同様に[自分ができること]として生徒のリーダーの協力を得て、単独で日本語で授業を何とか進めているようである。

(29) NT4: 一人で授業もありますね。何回も。(中略) 最初は戸惑いました。どうしたらいいかわからないのと、タイ語が分からない。1年生とかは日本語が分からないんで、どうしようってなりましたね。(中略) でも、一番前の席の子が結構助けてくれるんで。注意してくれるし、日本語も一番うまいんで、(他の生徒に) 伝えてくれます。

NT4が日本語教育経験が十分になくとも、NNT7が具体的に指示をして、NT4がプリントを作成するというように、[協働相手からの支援]によってTTが上手に進められている。NTの年齢、教育経験は最重要ではなく、NTとのTTの授

業をどうデザインするかは [NNT の力量次第] であるという考えを持っていることが (30) の NNT の語りから見受けられる。NNT7 は自分自身のことを「面白い人」と自己形容し、NT との TT を行うために日本語能力や教授経験以外の自分自身の価値を認めていることがわかる。(31) にも「スタイル」という言葉が出てくるが、(30) では、教授スタイル、教え方の意味で使われており、学習者を惹きつけるような NNT 自身の面白い教え方を NT に伝え [過去の学びの共有] をしたいと考えている。(31) は、日本人はどのように授業をするか前もって話し合っておくという日本人の一般的な仕事の進め方や傾向を日本人のスタイルと述べている。(32) も同様に日本人の仕事の進め方や傾向のことを意味している。

- (30) NNT7: 私は NT 誰でもいいです。それは NNT によります。私は面白い人。
(授業は) 面白いスタイルを NT に伝えたいです。こちらの方がいいですね。
生徒たち勉強しながらもっと面白い方がいい。
- (31) NNT7: 日本人のスタイルは、(授業でやることを) 全部決めます。こちら、導入 10 分でできますか。こちらの内容はあと 10 分でできますか。
- (32) NNT7: (困ったことは) 私はない。いつも日本人はいいと。私、経験がある。日本人のスタイル知ってますから。だから、例えば、約束時間、私も守って。だから大丈夫。
- (33) NNT7: あとは、相談。例えば、こちらがいいですか、できますか。自由にどうぞ決めてください。

また、NNT7 は、一緒に NT と仕事を進めていくにあたって (32) に見られるように [協働相手の文化背景への理解] が見られる。そして (33) のように、きちんと具体的に [気軽な授業相談] の時間をとって、相手を尊重して自由に授業のアイデアを言えるように [協働相手への気遣い] がある。このような [協働相手への気遣い] が NT と協働でうまく仕事をしていく秘訣の一つであろう。

以上、高校①～④における NNT 及び NT の語りのデータの分析結果について述べた。個々の教師の語りには TT に対する不満が見られ「表面的な協働」になっている可能性はある。しかし、それを教師自身は大きな問題点だと認識はしてい

ないことから、これら4つの高校では教師間協働がうまくなされていると認識されているようである。前述の中山ほか(2015)の教師間協働の定義を踏まえると、調査対象のこれら4つの高校では、教師間協働が行われている面と、教師間協働が行われていない面とが見受けられた。以上、よりよい教師間協働のために双方の教師が工夫している点や具体例について、NNT及びNTの語りよりまとめた。

5. 考察

前章の分析より、データに記述した構成概念を紡ぎ合わせ、ストーリー・ラインとして記述したものが以下のとおりである(大谷2019)。

【タイの高校における教師間協働のストーリー・ライン】

タイの4つの高校ではNNTとNTは[協働に関する固定的役割観]を基盤とした[分業による役割分担]がなされている。NTの中には[単独で授業を行う現実と不安]を感じる者もいた。[協働を困難にする学校側の要因]として、[学校側の支援体制]が不十分であることに言及しつつ、[学校への不満]を持っているNTもいた。また、NT側からはNNTに対して[教師間協働ができない状況への不満]も見られた。協働で行うこととしては、[NNTとNTによる情報共有]が挙げられる。特に[教師間の生徒情報の共有]である。教師間協働は[時間経過による協働体制の変化]が生じることもあり、教室内のTTという協働から教室外で情報共有を行うだけの[ゆるいタイプの教師間協働]へと変化した例がある。NTとNNTで[気軽な授業相談]をする中で、自分のTTの経験による認識や[NNTとNT間の教育観のずれ]に気づき、[認識の変化]を引き起こしている。TTは[NNTの力量次第]という面もあるが、そのNNTがNTと[過去の学びの共有]を行う中で、[協働相手からの学び]によって[再認識したTTのよさ]が現れることがある。NTは授業以外でも[求められるNTの役割]に応えるべく学校行事など[自分ができること]を積極的に行い、[協働相手や職場への感謝の念]を持っている。さらに、[協働相手との人間関係の構築]のため[干渉回避の工夫]がなされている。また、[協働相手の文化背景の理解]、[協働相手への気遣い]、[協働相手に頼る姿勢]も必要であり、それによって[相手からの支援]を受けることが可能になる。よりよい教師間協働のためには、[密なコミュニケーションによる信頼関係]を築き、[協働相手との人間関係の構築]をしていく中で[互恵的な役割付与]がなされ、[協働相手と共に成長すること]が求められる。

本研究で得られた上記のストーリー・ラインより、次のように理論記述を試みる。ここでの理論とは、「普遍的かつ一般的に通用する原理のようなものではなく『このテキストの分析によって言えること』」（大谷 2019）である。本調査によりタイの高校の日本語教育において、NNTとNTのよりよい教師間協働のために以下のことが重要であると言える。

【タイの高校における教師間協働の理論記述】

- ・ NNTとNTは[協働に関する固定的役割観]を基盤とした[分業による役割分担]がなされる。
- ・ NTには [単独で授業を行う現実と不安]、 [協働を困難にする学校側の要因]として[学校側の支援体制]に対する [学校への不満]、 [教師間協働ができない状況への不満]が生じることがある。
- ・ 教師間協働では[NNTとNTによる情報共有]、特に[教師間の生徒情報の共有]が行われる。
- ・ [時間経過による協働体制の変化]が生じ、TTという協働から教室外で情報共有を行う [ゆるいタイプの教師間協働]へと変化する。
- ・ NTとNNTで[気軽な授業相談]をする中で、 [NNTとNT間の教育観のずれ]に気づき、[認識の変化]を引き起こす。
- ・ TTは[NNTの力量次第]だが、 [過去の学びの共有]を行う中で、 [協働相手からの学び]によって[再認識したTTのよさ]が現れる。
- ・ [求められるNTの役割]に応え[自分ができるところ]を積極的に言い、[協働相手や職場への感謝の念]を持つ。
- ・ [協働相手との人間関係の構築]のため[干渉回避の工夫]が行われる。
- ・ [協働相手の文化背景の理解]、 [協働相手への気遣い]、 [協働相手に頼る姿勢]が必要であり、それによって[相手からの支援]を受けることが可能になる。
- ・ よりよい教師間協働のためには、 [密なコミュニケーションによる信頼関係]を築き、 [協働相手との人間関係の構築]をしていく中で[互恵的な役割付与]がなされ、 [協働相手と共に成長すること]が求められる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、4校のNNT 7名、NT 4名を対象に実施したインタビュー調査より、タイの高校におけるNNTとNTの教師間協働をうまく行っていくために必要とされる要素をSCAT分析によって抽出した。

第2章で述べたとおりタイの教師間協働に関する先行研究は大部分が大学を対象としたものである。大学の場合は、各教師が独立した科目を担当し、単独で授業を行うことが多く、NTが[単独で授業を行う現実と不安]を感じることはない。一方、高校の特徴としてNNTとNTと一緒に授業を行うTTが行われていることが挙げられる。そのため[協働相手への気遣い][協働相手に頼る姿勢]がより多く見られた。また、学校側の要因などでTTから単独授業へと[時間経過による協働体制の変化]が生じるケースがあった。

第1章でも言及したが、海外の高校を中心とした中等教育における日本語教育では、NNTとNTによる教師間協働の場が今後ますます増えていくだろう。NNTとNTによる教師間協働を困難にさせている要素、及び教師間協働がうまくいく要素について、特に中等教育を中心に事例をさらに収集し継続して探っていきたい。

付 記

本研究は、科学研究費基盤研究C（課題番号 26370613）（研究代表者 中山英治）のプロジェクトの成果の一部である。調査にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

注

- 1 「日本人教師」という場合、タイの学校教育における正規教員として免許を持っているかどうかは明らかではない。「ボランティア教師」と記載されているためティーチングアシスタントとして教える場合も教師として含まれていると考えられる。本稿でも「日本人教師」「日本語母語話者教師 (NT)」をアシスタントも含め実際に日本語を指導している人として広く捉えている。

- 2 国際交流基金 2018 年調査「5-1 日本語母語教師数・比率（全体）」より。インドネシアの NT 率は 5.0%、韓国は 4.9%である。一方、タイの NT 率は 29.2%で、中等教育における日本語学習者数の多い国の中では NT が占める割合が大きいと言える。
- 3 国際交流基金アジアセンターによると 2014 年から 2018 年度までに 422 人が派遣されている。
- 4 キーパーソンとなるタイ人日本語教師からの聞き取りにより、NT を受け入れた実績のある学校についての情報を得た。
- 5 NNT が、NT である調査者（筆頭執筆者）に対して NT に不利な内容を言いにくい、日本語で完全に意思を伝えられないという可能性は排除できない。しかし、調査実施前に調査の趣旨と共に個人情報の秘匿について十分に説明し率直な意見を述べるよう NNT に依頼した。また、お互いの日本語での内容が理解できているか確認しながらインタビューを進めるよう配慮した。
- 6 例えば、教室外で学習者や授業、日本語関連の行事について話をする等、相手と何らかの関わりを持つことを意味する。

参考文献

- 池谷清美・Kanokwan Laohaburanakit KATAGIRI・片桐準二(2012)「タイ国高等教育機関におけるタイ人教師と日本人教師の協働観の比較—PAC 分析からの考察—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第 9 号国際交流基金バンコク日本文化センター pp.29-38
- 大谷尚(2019)『質的研究の考え方—研究方法論から SCAT による分析まで—』名古屋大学出版会
- 香月裕介・松尾憲暁(2009)「タイ国ラチャバット大学における教師の仕事上の役割—日本語母語話者教師と非母語話者教師の協働を考える—」『日本語・日本文化研究』第 19 号大阪大学言語文化研究科言語社会専攻海外連携特別コース pp.127-140
- 香月裕介(2011)「タイ人教師と日本人教師の役割分担から生まれる「つながる」動き—タイ国 R 大学日本語学科を例に—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第 8 号国際交流基金バンコク日本文化センター pp.45-54
- 香月裕介・松尾憲暁(2017)「タイ人日本語教師と日本人日本語教師との協働に関わる三つの要因—日本人日本語教師の不慣れた経験の分析から—」『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』第 2 号 pp.31-44
- 門脇薫 編(2015)『海外における日本語非母語話者と母語話者教師の協働に関する基礎研究』

科学研究費研究成果報告書 (中山英治・高橋雅子との共著)

門脇薫・中山英治・高橋雅子 (2014) 「日本語非母語話者教師と母語話者教師の協働の現状と課題—タイと韓国の高校における母語話者教師対象の調査による考察—」『2014年度日本語教育学会 秋季大会予稿集』日本語教育学会 pp.141-146

国際交流基金 (2020) 「海外日本語教育の現状—2018年度日本語教育機関調査より—」
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2018/all.pdf> (2020年11月26日閲覧)

国際交流基金「日本語教育 国・地域別情報 タイ (2016年度)」
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/thailand.html>
 (2020年10月22日閲覧)

国際交流基金アジアセンター「日本語パートナーズ」<http://jfac.jp/partners/> (2020年10月22日閲覧)

中山英治 (2016) 「タイにおける日本語教師間の協働モデルの再構築—日本語母語話者教師へのインタビュー調査に基づいて—」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』28 pp.75-91

中山英治・門脇薫・高橋雅子 (2015) 「日本語非母語話者と母語話者教師による教師間協働の実態調査報告—タイの高校における協働環境と協働内容—」『いわき明星大学人文学部紀要』18 pp.19-34

中山英治・門脇薫・高橋雅子 (2017) 「理想的な教師間協働を経験している教師の語り—SCATによる構成概念と理論仮説—」『立教日本語教育実践学会』5 pp.64-74

松尾憲暁・香月裕介・井上智義 (2014) 「日本人教師はタイ人教師とともに働くことをどうとらえているのか—量的調査と自由記述の分析から見えること—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第11号 国際交流基金バンコク日本文化センター pp.111-120

Holliday, A. (2006) Native-Speakerism., *ELT Journal* .60 (4) pp.385-387

Kadowaki, K. (2018) The role of native speakers in high school Japanese programs in South Korea, Indonesia and Thailand. *Japanese language and soft power in Asia*. Singapore: Palgrave Macmillan. pp.123-139

カドワキ カオル (摂南大学)
 ナカヤマ エイジ (大阪産業大学)
 タカハシ マサコ (都留文科大学)

Elements Essential for Collaboration between Thai and Japanese Teachers Case Studies at High Schools in Thailand

KADOWAKI Kaoru, NAKAYAMA Eiji, TAKAHASHI Masako

In Thailand, the number of learners who study Japanese as a foreign language at schools has been increasing, and many of them are high school students. Most of the Japanese language teachers there are Thai teachers who are non-native Japanese speaker teachers (NNJSTs). Recently native Japanese speaker teachers (NJSTs) very often participate to teach Japanese with Thai teachers at high schools. However, the reports and studies on how Thai and Japanese teachers work collaboratively to teach Japanese at high schools are limited in publication.

This paper examines essential elements for better collaborations between Thai and Japanese teachers in Japanese language teaching at high schools in Thailand. This study presents an analysis of the interview data obtained from these teachers in Thailand, utilizing the SCAT (Steps for Coding and Theorization) method.

It is important for both Thai and Japanese teachers to maintain communication to share information and understand with each other, and have positive attitudes for collaborative teaching between NNJSTs and NJSTs. They need to have more experience in collaborative teaching of Japanese and to be flexible in their collaboration styles.